

得られる熟練した看護技術のようなものではないかと考えますが……4年間の大学教育の中では困難だと思います。それは卒後職場で実務の中で積み重ねてゆくか、或いは、進学して研究課程の中で得られるであろうと私は考えております。それよりも大学で学んだ教養科目や、クラブ活動等を通して得た有形無形のもを基礎として、皆さん独自のものを生み出してゆくことを期待しておりますし、又皆さんの先輩の多くの方々がこれえてくれております。要は皆さんが職業にとりくむ姿勢が大切であると信じます。

女子大のカリキュラムにつきましては、先程山崎さんから報告がありましたように、30年経って初めて、大学らしいすっきりしたカリキュラムに改善されたことを喜んでおります。これには、6大学での研究班の検討や学会での討議、30年の歴史をふまえての貴重な成果であると思えます。今後この運営に当って諸先生方に、本日の皆様方の意見も考慮して頂き高知女子大学衛看の特徴を生かして頂きまして、社会の要請に応える有能な人材の育成に努めていただくことを希望しまして、まとめとします。

## 研究発表 第一群

### 非行の看護から —この失敗例が教えるもの—

藤戸病院

山崎 マリ(20回生)

新見短期大学

梶本市子(13回生)

私たちは、精神科病院における非行の看護の限界やあり方を考えさせられたY子について考察し、今後の非行の看護に役立てたいと考えた。

症例紹介：Y子は家出、オートバイ暴走、不純異性交遊、金銭乱費などの非行行為のために入院になった中学3年生の少女である。7ヶ月間という比較的長期入院となり、入院中に中学校を卒業した。家族は両親とY子と小学6年生の弟と2年生の妹の5人家族である。

Y子は母が二度目の夫と離婚した後に出生し、5才になるまで母方の親類宅を4回転々と預けられた、その間母は養育費を送ってきた。預け先の伯母はきびしくて感情的な人で、甘えさせてもらえず、一度は荷物を造り放り出されたという。

6才のとき、母が今の父と再婚し、母の建てた下宿屋に父と3才の弟が入ってきた。この頃から家の現金持ち出しが始まり、困った両親は体罰を加えようと、車にロープを積み、Y子を誘い出

したけれど逃げられたこともあるそうである。

小学3年生のとき妹が誕生している。弟や妹のお守りを再々させられ、自宅で大人達がバクチをしている間、母の言いつけで妹を風呂に入れたりした。

両親の仲は悪く、けんかが絶えず父が弟を連れて家を出たこともある。弟とY子は仲が悪く、父とY子の仲も他人行儀であり、Y子にとっては暖かい家庭とは言えなかったようである。

中学3年になり急に成績の上ったY子に母は一流高校へ進学するようせき立て、それに反抗するように夏休みから非行グループとつき合い始めた。たび重なる家出の末、保護され無理矢理入院させられることになった。

入院経過：無断離院の予防と内省させる目的で保護室へ入院してもらった（54年1月末）。3月の卒業式後に退院させる方針で治療が行われた。しかし、Y子の高校進学への希望は願書申込みが間に合わず、あきらめざるを得なかったことや、両親がY子をひきとる気持ちがないために退院のメドは伸びた。Y子が退院したことで安定した家庭をこわされる、と拒否的な両親と動揺するY子との家族調整には、多大なエネルギーを注がねばならなかった。Y子には来年の高校受験を目標に根気強く努力する態度が養われるようにと看護を行った。しかし、病室が保護室から旋錠しない環境に変わってゆく中で、喫煙、嘘、生活の乱れ、反抗の問題行動が現われはじめ、ついには頻々として起る現金盗難事件の犯人であることが発覚し、退院となった。

考 察：Y子の看護は、精神面への援助と生活訓練とを主として行ったが、効果は上らなかった。この看護を振り返ってみると、次の3点が弱かったのではなかったかと思われる。

①内面への深い理解をもつ、②教育的な働きかけ、③中立的立場に立つ。この3点につき考えてみる。

① 内面への深い理解をもつ点について、

保護室でY子の悲しい生いたちを聞き、冷たい両親像を肌で感じた私たちは、同情し、全面的にY子の気持ちを受け入れ、内省の援助をしてゆこう、そして何とか助けてやりたいと思った。Y子もまた、「病院の人みんなが心配してくれている、私は頑張るつもりだ」と語り、お互いに心のふれ合いよろこびを感じていた。Y子を信じてゆこうとした私たちは、無断離院を怖れている両親をしり目に、旋錠しない病室へと環境を移していった。しかし、「みんなの期待を裏切ったらいかんね」と張り切っていたにもかかわらず、一週間後には、かくれて喫煙をし、見つかると「もう誰れにも信用がなくなった、裏切ったことがつらい」と泣いてあやまるといった具合で、少しずつ生活も全般にルーズに気まぐらになっていった。「私は病気ではないのに、入院してみんなに迷惑をかけている。こんなに迷惑をかけてつらいから、いやな家庭だけど退院しようと思う」と、夜泣きながら看護者にすがりついても、翌日にはケロリとして、ルーズな生活と、ウソが続いた。あれは演技だったのかと思ったり、あれこ

そ本心ではないだろうか、もっと十分に気持を聞いてやりたいと思ったりした。

誰れにも信頼されず、誰れにも信頼できずにきたY子を、私たちは信じてゆくことで更生を期待した。だが次々に現われる問題行動に動揺し、「Y子のどこを信じてゆけば良いのかわからない」と悩み始めた。そして看護者間にチグハグな気持を起こした。看護をしても無駄だと思ふ者、どのように看護してよいかわからない者、どこまでもY子を信じてゆきたい者などだった。

Y子は出生以来、母にとっては心理的な捨て子だったという事が決定的な問題であった。余分者扱いされてきたY子は、母子間の基本的信頼関係形成ができていないと言える。病的にも思えるY子の行動の裏にある、この点の理解を基にし、だまされてもだまされても、成長の可能性を信じてゆく覚悟のようなものがあるのではなかっただろうか。「私はガッチリ受けとめてくれる人が欲しかった」と泣きながら訴えるY子を、本気で受けとめることから始めねばならなかった。

## ② 教育的働きかけについて

Y子の友達が非行化したことを、学校の教師にも問題はあつた、と話してくれたことがある。友達がタバコを吸っているのを知っているながら、教師は見ても見ぬふりをしていたので、友達は意識的に悪事を重ねていった、という。この友達の心理を「どうせダメな子だと見捨てられたことへの反発だと思う」と解釈していた。

Y子の場合、表面的な言動、嘘、反抗、盗み、生活のルーズさに看護者がイヤ気がさしたり動揺したり連続であったが、嘘、反抗には看護者の腹立たしさを直接ぶっつけてみる。盗みをしているにちがいないと思ったら、その場で問い正してみる。生活のルーズさを徹底的にためなおす。以上の事が必要である。積極的な教育的働きかけとなりにくかった点を反省する。

## ③ 中立的立場に立つ点について

入院当初、親に看護者が必要な衣類を頼んでも全く届かず、同席面接のために来院を促してもなかなか来院せず、卒業式にY子を出席させることにも非協力であり、しだいに冷たい両親像が浮び上ってきた。この両親への働きかけとして、両親、Y子、医師、看護者の同席面接を行い家族調整をはかった。第一回の同席面接では、Y子も両親もさほどうれしそうな様子はなく、双方が様子をうかがうように沈黙が流れ、Y子が小声で「もう悪いことはせん。真面目にする、反省している」と言うと、父がすかさず「どうした聞えん何と言うた」と聞き返す。母は入院前の万引についてしつこく問い正し、Y子は泣きながらシラを切り通す、といった具合だった。「今までだまされ通してきたので信じる気になれない」とあばきたてる母親。この両親、時に感情的で攻撃的な母に向い、スタッフはY子の気持をわかってやってほしい

と話し合った。しばらく親への説得という形の同席面接が続いた。いこうに効果は上らず、両親は病院側に不信さえいやくようになった。Y子の代弁者の役割を必死でやってきた看護者に欠けていたことは、Y子に手をやいてきた両親の気持を充分救ってあげてなかったことだと思われる。一般に思春期患者の治療は本人のみならず親も対象とするわけであるが、看護者として、母の苦しい心境を受けとめることができていたならば、母が子供の問題の一端を自らの問題であると気づかせることができたのではないか。そうすれば事態は全くちがった方向に動いていたのではないかと思う。ここで中立的な立場に立つと私たちが表現したのは、Y子の心にも触れ、両親の心にも触れる中で、両方を支えて導いてゆくことを言った。非行の治療が、どこで行われるのが最適であるのか、種々意見のあるところだが、今後われわれの精神科病院でこの種の非行の治療が行われる場合、今回考察したことをもとにし、さらに病院管理上の問題をも考え合わせた看護を行い、可能な範囲をみきわめてゆきたい。

#### 参 考 文 献

- 1 土居 健 郎 非行の心理(土居「甘えの雑稿」) 弘文堂 1976
- 2 福 島 章 思春期非行の意味 臨床精神医学 10:1303 1976
- 3 内 山 喜久雄 非行児 黎明書房 1978
- 4 ジェームス・F・マスターソン 青年期境界例の治療 金剛出版 1979
- 5 エリク・H・エリクソン 自我同一性 誠信書房

以 上

#### 心理テストから

全体の反応数が少なく、検査に対する意欲的なとりくみに欠け、おざなりな反応の仕方である。W%の高さは、知的能力の高さを示しているが、野心的で競争心が強く、対人関係において緊張し易く、要求水準の過度に高い未成熟な人格が考えられる。

またF%の低い点から、ものごとを主観的に見、現実の客観的把握に失敗しがちであり、主観的な歪曲のため対人関係を困難にしたり、情緒的不安定に陥り易いと考えられる。

さらに、m反応の出現は、顕示的・独善的である反面、周囲との不調和から不満足感・緊張感が形成持続され易く、要求水準の高さとの齟齬をきたす結果になることを示している。

カラー反応における形態性の低さは、情緒的な統制の弱さを示し、衝動的で無統制な行動をとり易く、社会的適応の困難をきたしている。この事は、色彩カードに対する反応%にも現われている。劣等感の強い、行動的非行型の反応を言えよう。

山光康雄記